

開館5周年記念

讃岐漆芸の美展



平成6年
1月21日(金)~2月13日(日)

開館/午前9時~午後5時(展示室入室は午後4時30分まで) 初日は午前10時開展
毎週金曜日は午後7時まで開館(展示室入室は午後6時30分まで)
月曜日休館

高松市美術館 高松市紺屋町10-4
TEL(0878)23-1711

入場料/一般700円・高大生400円・小中生200円 (一般前売および団体20名様以上は2割引)

主催/高松市美術館・四国新聞社・西日本放送

玉椿象谷
「彩色蒔醬料紙硯匣」(1854)
(香川県文化会館蔵)



石井碧堂
「狹貫彫堆朱堆黒硯屏」(1932)



音丸耕堂
「彫漆月之花手箱」(1942)



谷沢不二松
「草花文彫漆香盆」(1933)



磯井如真 「サボテンにホロホロ鳥彫漆飾棚」(1936)



鎌田稼堂 「堆朱覆盆」(1941～45)

讃岐漆芸の美展

温暖で美しい自然に恵まれた讃岐高松の地は、江戸時代末に玉楮象谷によって漆芸発展の基礎がつけられました。象谷の作風は極めて多彩で、その技法においては彫漆はもとより、蒔髷、存清、籃胎蒔髷などに及び、中国で発達した彫漆や東南アジアの籃胎蒔髷の影響を強く受けながら独自の日本の漆工技法を完成させました。ことに蒔髷、存清はわが国に新しい漆工技術を取り入れたことで注目されています。高松の地の漆芸は以来こうした技法を特色として、明治から大正へと多くの名工によって受け継がれました。

ことに昭和2年から帝展、新文展に工芸部が設置されてからは、作者自身の個性的表現が重視されるようになり、磯井如真らを中心に独創的で近代的感覚にあふれる作品が次々に生み出され、漆工芸の近代化が確立されました。また戦後も日展、伝統工芸展を舞台に清新な息吹と現代的で豊かな感性に彩られた讃岐漆芸が優れた作家たちによって創出され、脈々とその伝統は受け継がれ、発展させられています。この展覧会は開館5周年記念展として玉楮象谷から今日に至る讃岐漆芸の流れを概観し、そのきらびやかな美の変遷を展観するものです。

■次回展覧会のお知らせ

キュビズムの巨匠— レジェ展

2月25日(金)～3月27日(日)

■第5期常設展のお知らせ

20代の作品とその後 (現代美術・工芸部門)

1月22日(土)～3月27日(日)